

■ 教員紹介

岩城 達也 教授

専門分野：生理心理学・感性工学

- 研究内容** 生理心理学は、心的過程を生理応答と対応づけて調べる学問である。私の場合、心的過程の研究対象は感情であり、感情現象の中でも混合感情や感情の時間的ダイナミクスに注目し、これらを脳波活動と対応付けることで、感情過程に対応した脳活動を探索している。一方で、モノに対する感情反応は製品やサービスのデザインに直結しており、基礎研究で得られた知見を産業界で応用することも試みている。
- 研究業績**
1. 「匂い刺激提示に伴う不快評価に関連した前頭部脳波活動の探索」, *Aroma Research*, 15, 30-35, 2014年
 2. 「Fictionality is associated with positive emotions towards negative films」, *International Journal of Affective Engineering*, 16, 37-41, 2017年
 3. 「入眠時心像を用いた入眠過程における感情効果に関する心理生理学的研究」, *日本感性工学会論文誌*, 17, 227-232, 2018年
 4. 「感情画像刺激提示下の脳波アルファ帯域実効電圧のスケーリング係数の応答」, *電子情報通信学会論文誌D*, J102-D, 399-410, 2019年
 5. 「感情状態と脳波」, 石井克典 (監修) 「IoHを指向する感情・思考センシング技術」, シーエムシー出版, 55-59, 2019年

遠藤 歩 准教授

専門分野：臨床心理学

- 研究内容** これまで箱庭療法研究を中心に、臨床心理面接におけるつまずきや心理検査に関する研究を行ってきた。現在は、上記テーマ以外に、カウンセリングやさまざまな心理療法における治療関係の構築や効果について、主としてパーソンセンタード・アプローチの立場から取り組んでいる。
- 研究業績**
1. 「箱庭制作者と評定者における状態不安と作品の印象との関係」, *心理学研究*, 82巻6号, 540-546, 2012
 2. 「箱庭作品の特徴およびイメージの諸相と不安との関係」, *ヒューマン・ケア研究*, 13巻2号, 125-133, 2013
 3. 「行動分析による箱庭制作過程の検討—不安との関連を中心に—」, *箱庭療法研究*, 25巻3号, 31-40, 2013
 4. 「自閉症スペクトラム障害および双極性障害の成人男性に対する認知行動療法的アプローチ」, *東海心理臨床研究*, 10巻, 20-26, 2015

久羽 康 講師

専門分野：臨床心理学

- 研究内容** パーソン・センタード・アプローチ、特にフォーカシングを専門とする。心理臨床家がフォーカシングを学ぶことの意義にも関心を持つが、研究の中心的テーマは、心理療法（カウンセリング）において人と人とが関わり何かを語る中で何が起きているのかを、フォーカシングや対象関係論、現象学の観点から明らかにすることである。
- 研究業績**
1. 「セラピーにおける他者性についての現象学的考察」 *心理臨床学研究*, 31, 376-386, 2013年
 2. 「Congruence and incongruence as human attitudes」 *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 13, 200-208, 2013年
 3. 「象徴化のプロセスとしての人間主体」 *人間性心理学研究*, 33, 39-49, 2015年
 4. 「主体—対象の可変的境界としての象徴化」 *人間性心理学研究*, 35, 37-47, 2017年
 5. 「心理療法における概念の用い方についての一考察」 *臨床心理学*, 20, 103-111, 2020年

久保 尚也 講師

専門分野：学習心理学・行動分析学

- 研究内容** 刺激性制御の中心課題である弁別行動を中心に研究活動を行っている。その中でも、大きさや明るさなど、ある特定の刺激次元が異なる2つの刺激のうち、“より明るい刺激”や“より大きい刺激”を一貫して選択する相対的弁別行動について研究を重ねてきた。特に、生体がどのような経験を経ることで、特定の刺激を弁別する絶対的な弁別ではなく、相対的弁別行動を自発するようになるのか、その形成過程についてハトやヒトを対象に研究を続けている。
- 研究業績**
1. 「ハトによる「線画顔刺激」の年齢弁別」, *行動分析学研究*, 24, 41-53, 2010年
 2. 「複数事例訓練によるハト (*Columba livia*) の相対的数量弁別」, *動物心理学研究*, 64, 1-10, 2011年
 3. 「条件性弁別手続を用いたハトの相対的弁別行動の分化強化」, *駒澤大学心理学論集*, 17, 9-17, 2015年
 4. 「ハトにおける大・中・小の条件性弁別」, *駒澤大学心理学論集*, 19, 23-33, 2017年
 5. 「条件性弁別手続を用いたハトの絶対的・相対的弁別行動の分化強化訓練」, *行動分析学研究*, 32, 21-35, 2017年

鈴木 常元 教授

専門分野：臨床心理学

- 研究内容**
1. 精神分析、自律訓練法、エリクソニアン・アプローチなどの治療法が催眠から発展したのみならず、催眠は行動療法と組み合わせられることもある。このような、さまざまな心理療法と深い関わりがある催眠を基点としながら、現代の心理療法諸派の理論や技法を統合的に捉えること。
 2. 心理療法は西欧由来のものであるが、その理論・技法を日本語・日本思想の文脈から理解すること。
 3. 自責的な古典的うつ病とは異なる、現代青年の抑うつにみられる他責的攻撃性に関する実証的検討。
- 研究業績**
1. 「外傷体験をもつ女性の心理療法における安定化に伴う記憶の回復」 *心理臨床学研究*, 26, 466-476, 2008年
 2. 「西欧心理療法の言語的背景—エスの日本的理解へ向けて—」 *精神療法*, 35, 761-769, 2009年
 3. 「日本の自律訓練法再考—J.H.Schultzの方法との比較を通して—」 *心理臨床学研究*, 29, 73-84, 2011年
 4. 「集団における自律訓練法上級段階の試み—描画によるイメージの変化—」 *自律訓練研究*, 31, 29-39, 2011年
 5. 「感情の言語—心の能動 (action) と受動 (passion)—」 *感情心理学研究*, 23, 38-45, 2015年

永田 陽子 教授	専門分野：認知神経心理学，発達臨床心理学
研究内容	空間における人間の認知過程，特に視覚的注意機能を担う高次神経系のメカニズムについて発達の側面からとらえることを目的として研究を続けている。近年は神経発達症軍の児童自閉性障害，学習障害，ADHDおよび周辺児における認知発達の療育を通して，その障害から人間の認知過程を探求するとともに，困難を示す認知能力の向上にむけての援助に貢献することを目的としている。
研究業績	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「MEG measures of covert orienting and gaze processing in children」, Brain Topography, Vol.26, pp616-626, 2013 2. 「Spatio-temporal localisation of attentional orienting to gaze and peripheral cues」, Brain Research, Vol.1439, pp.44-53, 2012 3. 「大学生を対象とした有名人顔写真の選定－相貌失認に関する認知神経心理学的アプローチ」, 駒澤大学心理臨床研究, 12巻, pp3-9, 2013 4. 「視覚認知課題に困難を示した11歳男児への療育の過程」小児の精神と神経, 53巻 pp367-380, 2014

長谷川孝治 教授	専門分野：社会心理学
研究内容	自己とwell-beingの関係について，社会心理学的な観点から，実証的な研究を行っている。具体的には，自尊心の低い人は，なぜ自己評価を低いまま維持させているのかという問題に関して，その人自身の認知だけでなく，他者との関わり方を主要な規定因と考える，下方らせん過程の観点から検討している。また，近年は，このような低自尊心者の対人行動に関して，TwitterやLINEに代表されるSNS上の下方らせん過程を検討する研究を行っている。さらに，産学官連携の面では，高齢者のwell-beingに関して，現場における実証的な準実験を行い，その促進メカニズムの解明に取り組んでいる。
研究業績	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ボイストレーニング・プログラムへの参加経験が心理的健康と夫婦間コミュニケーションに及ぼす影響－高齢男性と配偶者のwell-beingを促進するか－」, 実験社会心理学研究, 58, 15-28, 2018 2. 『展望 現代の社会心理学1 個人のなかの社会 (第14章 自己の表現)』, 誠信書房, Pp.272-293, 2010 3. 「インターネット上の自己評価と現実の自己評価との相互影響過程についての検討：両者のズレと精神的健康との関連の観点から」, 実験社会心理学研究, 23, 45-56, 2007 4. 「自己評価に関する自他の相互影響過程の変容についての検討－アイデンティティ交渉の理論的枠組みを用いて－」, 社会心理学研究, 15, 110-124, 1999 5. 「アイデンティティ交渉過程と精神的健康との関連についての検討 実験社会心理学研究」, 38, 151-163, 1998

藤田 博康 教授	専門分野：臨床心理学，統合的心理療法，カウンセリング心理学
研究内容	心理療法諸理論や臨床心理学，カウンセリング心理学が，いかに心理援助実践の現場に役立ち，心深く悩んだり困難を抱える人々の回復やウェルビーイングに貢献するかという観点からの実践型研究を主にやっている。対象領域は，個人心理療法，家族臨床，非行臨床，学校臨床ほか，一般の人々の心理的健康面等も含め多岐にわたる。
研究業績	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「非行・子ども・家族との心理臨床～援助的な臨床実践を目指して～」(単著) 誠信書房, 2010年 2. 「ロールプレイによるカウンセリング訓練のかんどころ」(共著) 創元社, 2014年 3. 「親の離婚と子どもたちのレジリエンス」児童心理, 2017年5月号, 6月号, 7月号, 金子書房 4. 「キーワードコレクション カウンセリング心理学」(共編著) 新曜社, 2019年 5. 「家族の心理～家族への理解を深めるために」(改訂版) (共著) サイエンス社, 2019年

八巻 秀 教授	専門分野：臨床心理学，アドラー心理学，質的心理学
研究内容	効果的な心理臨床活動の原点として「アドラー心理学 (=個人心理学)」に臨床思想的基盤に置きながら，そこから派生してきた心理臨床理論・技法を駆使した心理臨床の実践的研究を行っている。それらには，効果的・効率的な臨床実践を模索する「ブリーフセラピー」, 個人だけではなく家族や集団・組織も視野に入れた「システム論」や「家族療法」, その発展形である社会構成主義によるアプローチである「ナラティブ・アプローチ」や「オープンダイアログ」など，多様な臨床実践がある。それらを様々な現場で実践しながら，そこから得られた様々な知見を「質的心理学研究法」によって質的に分析をしていき，その結果や成果を専門家だけにとどまらず，あらゆる人々へ発信できるような社会貢献的な心理実践研究を心がけている。
研究業績	<ol style="list-style-type: none"> 1. 『おしえてアドラー先生！ ころのなやみ，どうしたらいいの？ 学校では教えてくれない，ころの教室』(監修), 世界文化社, 2017年 2. 『臨床アドラー心理学のすすめ—セラピストの基本姿勢からの実践の応用まで』(共著), 遠見書房, 2017年 3. 「〈ブリーフ〉はどこからきたのか，そして，どこへ向かうのか：〈ブリーフ〉の臨床思想の試案」ブリーフサイコセラピー研究, 第26巻・1号, 2017年 4. 「アドラー心理学を学ぶ～アドラー心理学が今の日本に問いかけていること」東洋英和女学院大学心理相談室紀要, 第21巻, 2018年 5. 『定年後の人生を変えるアドラー心理学 Adler's Barへようこそ』(監修), 講談社, 2018年